

# 第15回全道小中学生立体造形展



## 文部大臣奨励賞

旭川市立江丹別小学校6年 山口 綾

### 「牛」

⑨集めた素材の形やマチエールを生かして、うまく組み合わせ迫力ある生き生きした牛を表現しています。

## 北海道知事賞

室蘭市立北辰中学校2年 伊部 晶子

### 「友人」

⑨モデルから得た気持ちを大切に、全体をしっかりとまとめています。ていねいでしたりした仕事から作者の真面目さもうかがえます。



目次	苦小牧大会を終えて…………… 2・3	サークル紹介 留萌…………… 6
	苦小牧大会に参加して…………… 4	第15回立体造形展…………… 7
	全国大会に参加して…………… 5	サクラ・クレパス・あとがき…… 8



# 北海道 造形教育 連盟報

No.87 1990.12.5 発行

発行 北海道造形教育連盟

事務所 〒064 札幌市中央区宮の森4条11丁目4の1  
札幌市立三角山小学校 ☎643-1133

## 第40回全道造形教育研究大会 苫小牧大会を終えて



研究部長  
苫小牧市立明倫中学校  
佐藤 公毅

私達、苫小牧の造形教育に携わる者にとっての40回大会の夏休み明け、9月7日市内某所での大会反省会を持って総ての日程を終了しました。また、この会は私達苫小牧造形教育のリーダーである池本良三先生の御勇退、今後の御活躍を祈念し感謝申し上げる会でもありました。40回という節目の大会、そして世代交代という感が大きく、哀惜の情を禁じ得ません。大会終了後、大会運営委員長の挨拶文の中で「18回、30回、40回大会とみたびを数えた苫小牧大会ですが、次の大会には、大半の部会員の姿を見ることはないでしょう」とありました。気を取り戻し、日常実践を大切に毎日の授業を積み重ねていこうと新たに決意しているところです。

今大会は苫小牧市の一大イベント「紙フェスティバル」を柱にすえた大会でした。一市民の願いから生れた「紙フェス」は今回で3回目になりますが、実行委員会に私達造形部会がどのように参画していくか。授業実践・学校行事との関連・意義やねらいは、どのような作品をどのように発表するのか等々この3年間、部会員の共通理解はかかれるように話し合いを重ねてきたところです。また、月例の部会研修は「紙フェス」へ向けて行事を演出する造形（熱気球、くす玉、ダンボールプレイなど）、遊ぶ造形、飾る造形など紙を素材とした実技研修を行ない部会員が造形教育のための財産としました。この「紙フェス」は隣町の白老町でも行われてきました。このようなことで、白老町をはじめ胆振造形教育研究会の先生方にも今大会で多くの御協力、援助をいただいたところです。

苫小牧大会へ向けて実行委員会が組織され、本格的に動き出してから3年間。いろいろなことがありました。苫小牧市教育研究会は教科部会と教科外部会に分かれ、どちらかに任意に加入しますが、本年度の造形部会員は前年にくらべ増加し、73名（小57名、中16名）となり大会年度は減少するのではないかとこの予想が

はずれ大会の成功を確信したところです。ただ幼稚園部会、高校部会との交流が普段から少なく、今大会のために急遽、御協力をお願いしましたが、心良く、積極的に参加、御援助をいただきました。感謝の気持ちと、造形教育に携わる者の心暖さ、研修への前向きの姿勢を感じたところです。さらに若い先生方の爽やかさ、真摯さにこれからの造形教育がこれらの先生方に引き継がれていくのだという思いを大きくしました。

今大会の事務局長であった大月猛先生が準備途中で病癒に犯され、闘病生活に入られるというアクシデントがあり鈴木和雄先生が代りを果されました。大月先生の日も早い御回復を願っているところです。この大会へ向けての研修会、会議、宿泊研、帯広大会への20名を越える参加など、自前で、会合がおそくなくても食事を進められるこのボランティア、奉仕の精神が苫小牧の造形の先生方にはあるようです。この精神が「紙フェス」への部会員の先生方の協力となるのだと思います。地域の行事へ子どもと共に参加することは奉仕活動であり、社会連帯、郷土理解、郷土の文化の創造となる。このことが、「紙フェス」の意義と考えるのです。地域素材としての紙について、その教材化とその限界、系統的、特性などについて研修を深めました。その一つとして当市の製紙工場の見学があります。用途による紙の種類の豊富さ、時代を先取りする企業の商品開発におどろきました。さらに製紙工業の悪いイメージに対する企業努力（例えば古紙のリサイクル）など多くを学びました。造形教育の研修に止まらなかったわけです。

全体構想、研究主題の具体化の過程の話し合いの中で苫小牧造形部会の研修テーマである「深まりと広がり」の造形教育の広がり部分にスポットを当てるのが今大会であるという結論になったわけです。このことは30回大会からの継承となるもので、先輩諸氏に感謝するところです。さらに「紙フェス」には私達や子ども達が学ばしていただくという側面もあるわけです。紙フェス実行委員会をはじめ、各企業、各種学校、各団体、父母等の紙フェスに携わった方々に大会成功のための全面的協力にお礼申し上げますと共に私達の今後の地域への造形活動が待れることとなります。

大会当日、晴天。紙フェス会場と若草小学校会場に離れているので天候が心配の一つでした。苫小牧市はスポーツ宣言都市。文化面が軽視されています（？）が、あの総合体育館の広い平面と空間、そして時間を

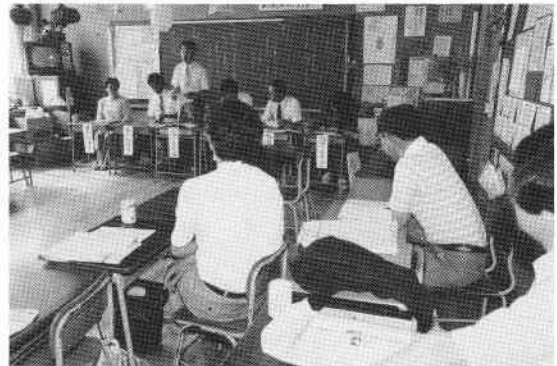
を使いきり、造形の解放圧に成得たかは問題ですが、休みとはいえ、月末の平日（企業にとっては社員を出すのは大変なようです）に多くの人々の参加で「紙フェス」が終了できたことは今大会の責任の大部分を果すことになり、重ねて紙フェス参加者の全員のみなさんにお礼申し上げたい気持ちです。私達、部会員も、あっち行ったり、こっちへ来たり、二役をこなしていそがしい一日でした。市民のあるグループが子どもと共に巨大紙に挑んでいました。紙で長い太い網をつくり、綱引きをしました。紙の強さを体験し、そして遊ぶ。私達教師にはない発想に思えました。出店のコーナーでは伊藤恵先生が紙の立体の作品づくりの店開き。先生の口上・話術のすばらしさ・経験に裏打ちされた教え方のわかりやすさ・手品のように作品が仕上がります。多くのお客を集めていました。造形教育の一つの姿を見せていただきました。

分科会において広がり造形教育について各地の実践例が交流され、私達も多くの教をいただきました。造形教育が広がり部分を目ざすことは一つの流れだと思います。どのように総合学習の場面でプロデュースしていくかが造形教師に求められることだと思います。学級、学年、学校、地域の文化の創造のために心を開き、自分の役割をはたすことです。さらにその基盤になる子ども一人ひとりの造形能力を深めていく必要があります。このことが全道造形教育研究会札幌大会へつながるのではと考えます。私達も大会終了後、また、地道な日常実践にもどり、確かな造形能力（技と心）一生きる力を育てるため努力していくつもりです。

70名ほどの部会員で全道大会開催の任を果たすことができたことに満足すると共に多くの方々にお助けいただいたことに感謝、お礼申し上げます。人と人との結び付きのうれしさ、楽しさを思いつつ……………。



紙スキ



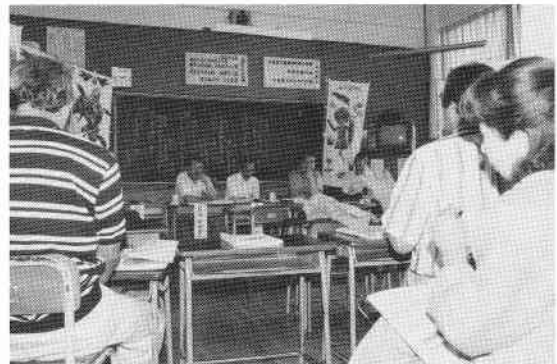
中学校分科会



出店、紙の立体



紙フェス全体



小学校分科会

# — 苦小牧大会に参加して —

## 広がり・深まり・そして感動!!

札幌私立清明幼稚園 細川 依子

今年の4月から何も知らないまま造形教育連盟に仲間入りし、幼・小・中・高の造形教育の広さ、それらに携わる方々の造形教育に傾ける思いの深さにただただ驚きの毎日でした。そんな私に、幼稚園部の人不足から分科会の司会という任が降ってわき、知らない者の強みで経験できたそれは、私の4月からのカルチャーショックにとどめの一撃となりました。

「紙の街」ならではのフェスティバルは紙の持つ七変化の魅力をますます広げてくれ、網走・室蘭・札幌・苫小牧各地から集まった分科会参加者は、幼稚園・小学校1年・小学校障害児学級と、経験も園長から初めての担任まで、それぞれの熱い心から語られる言葉に私は造形教育の奥の深さを感じずにはられませんでした。そしてこのすばらしい苫小牧大会の地で交流し合えた札幌参加者の仲間の輪、この大会は私にとって文字通り「広がり・深まり・そして感動!!」の二日間でした。この経験をぜひとも来年の札幌大会へとつなげて、もっと多くの幼稚園に勤める仲間達が参加できる大会になる様にとの思いを新たにしました。

## 紙のジャンプ台

札幌市立桑園小学校 小柳 雄詞

紙フェスティバル会場に入っている。観覧席から大きな紙を下げ紙のジャンプ台を作っている所だった。横で子ども達が紙と重りでジャンパーを作っている。その姿を見てふと思いついた。

兄と二人で物置の横にスコップで雪の山を作りジャンプ台を作った。ジャンパー（といってもその様な形）は焚付のまきを削って作った。小刀を扱う兄の手が手品使のように見えて、私も必死に真似して削った。滑走面は丸刀でみぞをつけ仕上げは木をあぶり全体にろうをぬった。飛距離をのばすため、踏切台の角度を変え、雪を高く積み上げた。いつの間にか雪山は物置よりも高くなっていった。次の日、周りにスラロームコースを作った。トンネルや橋まで作っていた……。

苫小牧の子ども達も、紙のジャンパーがうまく着地すると喜び、転倒してはくやしがつっていた。幼い頃の自分を見ているようだった。

紙風船・竹とんぼづくり、ダンボールの迷路……今の子ども達に経験させてやりたい材料をたくさん提供してくれた大会であったと思う。

## 未来に残る作品づくり

札幌市立澄川小学校 小林 万咲彦

今年の大会は、造形連盟40周年をむかえた苫小牧大会でありました。一言に40年ではありますが、その一年一年を背負って、研究を続けた先輩の苦勞を思う時、その歴史の重みを感じます。苫小牧に向う車の中で、伊藤恵先生から、「さやちゃん」という、自作の本をいただきました。表紙の絵は、これが本当の子供のすばらしい絵だと言える絵で、飾られてありました。文も、お孫さんとの交流を通しての感動的なものでありました。本を読んで、こんなに涙を流したことはありません。すばらしい作品でありました。

さて、苫小牧大会。教室内の造形活動から地域まで広げた造形活動の紙フェスティバルは、圧巻でありました。さすが、紙の町、苫小牧を強く印象づけられました。しかし、斯くも豊富な紙の中にあつて、私は、遠く、カナダ、フィリピン、アマゾンの森林たちのことを思い、心が痛みました。子供たちとの造形の世界は、地球環境も視野に入れ、消費でなく、未来に残る作品づくりでありたいと思いました。

## 欲しかった公開授業

札幌市立北栄中学校 村谷 利一

全道大会は毎年楽しみにしている大会である。特に今年は第40回の記念すべき苫小牧大会ということもあり期待感が強かった。紙の可能性の追求、授業での実験的試み等知りたい事が多かった。だが参加してみると私の期待感は少々大きすぎたようだ。公開授業がなかった事や授業で実践した事例発表も少なく物足りなさを感じた。我々の研究大会は授業抜きにしては考えられないし、子供の姿なしには語れない。地域のお祭りや研究大会とのかみ合せが追求不足だったように思われた。しかし、この大会を準備した苫小牧の先生方や関係者の皆様方には、目に見えない苦勞や費した労力は多大なものだったろうと感謝申し上げたい。

私は中学校Aの分科会に出席したが、ここでももう少し、授業の中で実践した発表と作品が欲しかった。子供の夢や創造性が紙という素材を通してどのように表現され追求されていったのか、その過程を含めてもっと知りたかったと思ったのは私だけだろうか。

来年は札幌大会、我々もがんばらなくては!

## ちょっと悔しい苦小牧

札幌市立西岡北中学校 嶋田 恵子

河原なでしこ・釣鐘にんじんの憩いを秘めた色を横目に、一路、苦小牧。“紙の街”で開かれる『紙フェスティバル』とは、本当に苦小牧大会にふさわしい。期待に胸はずませ、国道の標識を見て曲がる。

しかし、行けども聞けども、それらしき建物が見つからない。どう考えても、同じような所を3回はまわっている。迷路だ。一瞬、通り過ぎてきた、なでしこの野原が脳裏をかすめる。いや。カミ様に叱られる。

やっとの思いで体育館へ到着。でも、あのざわめきがない。『第三回……』の幕。知らなかった。原料木材や製造の過程、紙の起源や発達、和紙や民芸紙等々。第一回目から見たかった、いや、参加できたら……という思いが溢れる。今回は、苦小牧で製造される紙が中心のようであったが、大巾の巨大ロール紙等、さすが本場である。段ボールを使った作品も良かった。

やがて、子ども達の声が響き、あの懐しいざわめきに戻ってきた。青空の下、一年ぶりの顔、顔、顔であった。

## 「成就感の得られる題材を求めて」

北海道札幌南高等学校 小林 智彦

青年期の最中にある生徒たちは、日常生活の中に様々な問題意識をかかえており、内省的・懐疑的意識などとともに、自己主張の欲求が強まる。

それは、時に逃避的な病的症状を呈し、時には自己顕示的な言動として観照される。

このような自己探究に踏み出す青年期の心に焦点をあて、それらを立体的なイメージとして具現化（心のモニュメント）し、その制作活動を通し、精神的発散と同時に、自己の虚と実、理想と現実、美と醜等を考えさせる好機になればと思い実践してきた授業を、今回の苦小牧大会で提言として発表させてもらった。

自由に个性的に、より創造性のある、かつ、作品を完成した時の成就感を得られるような題材は身近にあるはずだが、私自身が自から、教師主導型の画一的な授業にしているのではないかと、改めて反省している。

生徒も、そして私自身も、ともに創造する喜びを味わえることのできる教材を今後とも、研究していきたい。

## 全国造形教育研究大会

### 熊本大会に参加して

連盟研究部長 伏見小学校 富田 泰

3日間にわたる熊本大会は、好天にも恵まれ、地方から参加した不案内な者も、時間を見つけてはあちらこちらと見聞を広めながら参加できたいへん良かった。

全道連校種別分科会（全国小学校造形教育教育連盟）は、決算の承認という型どりの進行の後、各地区からの参加者による自己紹介と研究活動の様子を報告する内容であった。中でも長崎県が強く印象に残った。

それは、「全国大会を是非本県で開催したい」というもので、その言葉の陰には、地域の実践の裏づけが強くあるものと感じた。また、そればかりではなく、図工や美術教育を担当するものに、今課せられている「教師の専門性」の自覚といったものを更に強く教えられる内容であった。

熊本大会もそうであるが、長崎は非常に組織がまとも、協力体制が十分整っていることも感じた。来年は、実技講習が中心の東京大会である。次に開催されるだろう長崎大会は授業中心であり「図工美術教育の在り方」を問うものではないかと非常に期待したところである。また、全道の「札幌大会にむけ努力しなければ」と思わずにはいられなかった。

### 熊本市立託麻原小学校での公開授業で学んだこと

紙面の関係で詳細に記述することができないが、新指導要領のめざす授業づくり（教材づくり）が強く打ち出されていた。しかし、いくつかの授業を参観し、私たちが「授業づくり」をする上で、留意しなければならない点を三つ考えさせられた。

#### 1. 逃避型（単に任せることでない）

・個性重視という名のもとに、手を引いている。

子どもの活動の成果につつも期待しその教材を造形学習の内容に位置づけていない。

#### 2. 偏向雑材料型（なにを使ってもいいではない）

・ひとつの題材で好きな材料をむやみやたらに使わせ、「思いのままに」のみを満している。

#### 3. 地域性強引型（子どもに合わない地域性）

・社会の流れや流行の流れに惑わされ、造形要素をしっかりとおさえていない。

### さいごに

北原白秋の生家と記念館のある柳川市を散策し、また、河下りを楽しみ、文化と歴史の重みの良さを快く感じた。白秋の「素材と感性」に満ち溢れた生涯にも触れ、忘れることのできない熊本大会となった。

## 留 萌 の 造 形 教 育

留萌郡小平町立鬼鹿小学校 竹内 堅治

留萌管内は北海道西北部、日本海に面し1市7町1村で構成されている。羽幌町の沖合いには、国の天然記念物に指定されているオロロン鳥などが群れ飛ぶ焼尻、天売島を臨み、南部には、道立自然公園に指定されている暑寒別岳がその山容の美しさを誇り、北部には延長256kmの天塩川が洋々と流れている。このように自然に恵まれた留萌は、それを生かした教育が、さかんに行なわれている。

さて、留萌地方美術教育研究会は、会員38名。今年で発足20周年を、迎えました。創設当時の諸先輩が退職した後、新人5名が、今年さらに加わり、20周年を一つの節目として、新たな出発を目ざし、はりきっております。

### 1. 20年の軌跡をふり返って

留萌地方美術教育研究会（留美研）は、昭和44年「全留萌子どもの作品を語る会」の形で発足。毎年開催地を変え、管内を一巡。12回の回数を数える。その間、昭和51年に、会の名称を現在の様に改め、大会名も、留萌管内造形教育研究大会とし、授業研究、提言、語る会、実技講習等を主な内容として開催しております。昭和58年には、全道造形研第33回大会を、留萌市において開催致しました。

又、隔年毎に、「留萌管内児童生徒版画集・彩」を発刊しており、今年で、第5集になります。作品のほかに、版画指導の手引きも掲載しており、現場の先生方より好評を得ているところです。

### 2. 研究の取り組み

効果的な導入のあり方にポイントを置いた表現力を高める指導法の3年にわたる研究は、先年度で終了し、今年度から、新たに次の様な研究を行なうことになった。

#### (1) 研究主題

子ども一人一人の個性的表現を援ける造形教育のあり方を求めて

(6)

#### (2) 副主題

子どもが自信を持って表現するための援助の工夫

#### (3) 研究の視点

①個性的表現を助ける基礎・基本の指導

②個性的表現を助ける教育の工夫と指導

③個性的表現を助ける評価の工夫

### 3. 研究大会の概要

○第19回大会（小平町：鬼鹿小学校）

3年生「お城をつくる」（彫塑）指導竹内堅治教諭。グループによる共同制作で、スケールの大きい作品づくり、音楽によるイメージづくりが、ユニークで効果的であった。

○第20回大会（留萌市：東光小学校・留萌中学校）

6年生「動くおもちゃ」（工作）須田晃至教諭。中1「クラスメイトを彫る」（木版画）小出倫生教諭。若さあふれるエネルギーな授業。教科通信「アートワーク」を生徒・家庭に向けて発行し、その成果を発表した中学校教師の提言等。



### 4. 本音をおつけ合う研究会に

このごろは、何につけてもスマートさが目立つ。そんなことでは、子どもは本当には育たない。自分の実践を、お互いに、おつけ合い、本音を出して語り合っこそ、明日への指導の手がかりが見えて来るのだと思います。

## 第15回 立体造形展を終えて

第15回全道小・中学生立体造形展の審査は例年通り9月から釧路、函館、室蘭、旭川の5地区で行われ、11月13日(火)には各地区審査員の他、北電代表、読売新聞北海道支社代表による全道審査会が行われました。

また、入賞作品は11月14日～19日の間、札幌ヨークマツカヤ8階に展示されました。

今回の作品は、昨年のように素材が多様であることに加え、一見何を使ってできているのか分からないけれど、よく見ると材料を大変工夫して使っているのが目立ち、一つ一つの作品に子供らしいアイデアと、それを支える指導者の見えない部分での工夫が強く感じられました。

入賞作品の中には、でき上がりのすばらしさよりも、楽しんでつくる過程を大事にした作品もあり、これが

らの立体造形を考える上で大いに参考になりました。

中学生の作品も年々レベルが上がり、中学校の先生達の熱心さがうかがわれるものばかりでした。特に彫塑作品の出来ばえの良さが目を引きました。

15回続きましたこの立体造形展も、諸々の事情により、残念ながら最終回ということになりました。

平面的な作品を集める所はあっても、このように大がかりに立体を募り、多勢の先生方で審査し、盛り上げてきたものはありません。重い作品、運びにくい作品、多数の作品等をフーフー言いながら苦心して運ばれた先生方の御努力は、形にした子供の夢を見てほしいという熱意そのものであり、審査は、それを見せていただいて学習する何よりの機会でした。今後もこのような場をなんとかして生み出していきたいと願いつつ、立体造形展を終了いたします。最後になりましたが、皆様の快いご協力に厚くお礼申し上げます。

(冨所)



## 原点

### 「下絵」

連盟顧問 高橋 栄吉

アブストラクトからシニールリアリズムに移行していつの間にか変わって来てしまった。約60年にもなる絵の生活は自分の身上の変化と共に自然に変わったとも思えるのである。

この絵は自分の分身の様にも思えるのである。身体の変化と思想の移り変りとは結びつきの所産物でもある。

若い頃は、短兵急にどんなイメージかを決めてからでないと絵は生まれなれないと思ひ、東京にも6年の間デッサンなるものを学んだ。然し目的が判然としたが自分の心情に問うてみた所が、実感として身についたも

のは甚だ即乾的であったようであった。

それから反省をしてとにかく今後も強く考えていることは何か、それには先輩の言、子供達の様子、世情の事、そしてこの問題を解きほごす本、この様な状態をくり返すことに懸命であった。

小説あり、講演会あり、音楽会あり、一杯の盃ありこの中であって、授業が生命であった。数本の本炭の粉の煙の中に見い出せた濃然の核となるものは、何か毎朝10号位の模造紙を10枚位部屋のイーゼルの前に列べて描きまくった。これが1ヶ月位たつと、その中核体の何たるか、構図の変化の末たどりついたものは何か色合いは、予想もしないものが、出てきたのである。

下絵をかく楽しみと苦味は今も続いている。

SAKURA **PIGmax**

不透明 水性 顔料インキ

PIGmaxから  
世界のマーカ―が  
変わります。

水性顔料。ペイントタイプだから  
振らすに即筆記OK！  
イヤなニオイがしません。

● 厚塗り、ニジミがありません。  
● 黒い面・ガラス・金属にも筆記OK！  
● 耐水性・耐光性にすぐれています。

石  
ブラスチック  
紙  
ガラス  
ボール紙


PIGmax 人

中文字 ¥150  
ツインタイプ ¥200

カラーバリエーション

※のりやアクリル塗料、接着剤との併用はできません。

（小売価格は別途です）


**株式会社サクラクレパス** 札幌営業所
 札幌市中央区南4条西13丁目  
TEL (563) 5161 (代)

あ と が き

あと一ヶ月で平成2年も終わりです。今年も全道各地でいろいろすばらしい実践が積みまれました。連盟の事業も正月に行われる全道教育美術展で本年度の全てが終了します。来年度はいよいよ札幌大会です。今まで何回かの会議が開かれ、準備が着々と進んでいます。連盟報87号の発行にこぎつけ、これから40周年誌の編集にかかるところです。

稲實 順(八軒西) 植木則子(藻岩南) 島 界二(札苗中) 岩間歳二(もみじ台中) 伊藤善彬(曙小)